

近世後期における毛呂本郷の人々の伊勢参宮―伊藤家文書の道中日記を中心に―

木暮 咲 樹

はじめに

江戸時代は、多くの人が旅に出るようになった時代として知られている。幕府の交通政策のもと、諸国の街道や宿場の整備が進み、人々が旅に出やすい環境が整えられたことが要因の一つである。また、旅行案内書や案内図、それに類する書籍などが多数刊行され、各地の名所や旅に関する情報が入手しやすくなったことも要因となった。しかし、江戸時代には現代のように制限なく自由に移動することができたわけではなかった。幕府から公式に認可されていた旅の目的は主に諸国の寺社参詣と、病氣療養などのための湯治の旅であった。江戸時代後期になると、そうした目的とともに、各地の名所を巡る例が増えていった。

寺社参詣の旅の目的地としては各地の様々な寺社が選ばれるが、特に多くの人が訪れた例があるのが三重県に鎮座する伊勢神宮である。伊勢神宮は、伊勢音頭でも唄われるように(1)一生に一度は伊勢参宮を試みたいという思いをもつ人も多かったとされ、時にはおかげ参りという大量の人々が一齐に伊勢神宮を目指すという現象も見られた。また、伊勢神宮の下級神宮である御師も各地で御札などを配り、参宮に来た人々をもてなして人々を伊勢参宮へと誘った。

こうした伊勢参宮の旅は埼玉県域からも訪れた記録が残っている。本論文では、文書館の収蔵資料の中の伊勢参宮の道中日記の一例を取り上げ、近世後期の毛呂本郷の人々の伊勢参宮の様子と、毛呂本郷で結成されていた伊勢講の活動の一端について検討したい。

1 伊勢参宮に関する先行研究

本論に入る前に、先行研究についてまとめておく。伊勢参宮に関する研究は、社寺参詣研究の代表的なものとして、様々な角度から研究がなされている。歴史的な視点はもちろん、伊勢講など庶民信仰に着目したものは民俗学の研究でも扱われてきている。

今回の論文で主題とする道中日記や、伊勢参宮のルートについての研究には次のようなものがある。新城常三氏の著書『新稿 社寺参詣の社会経済史的研究』(2)は、古代から近世までの社寺参詣のあり方について、新城氏の専門とする交通史という視点から研究したものである。交通を伴う旅という主題のため、遠隔社寺への参詣について中心に扱い、伊勢参宮だけでなく四国巡礼や熊野詣など幅広い社寺参詣について論じている。基本的な史料はもとより各地の地方史料も多く

用いており、社寺参詣研究の中の基礎研究的な位置付けとなっている。その他、主要な文献のみでも西垣靖次氏(3)、相蘇一弘氏(4)、小松芳郎氏(5)、山本光正氏(6)、桜井邦夫氏(7)、深井甚三氏(8)、原淳一郎氏(9)、小野寺惇氏(10)、金森敦子氏(11)、谷釜尋徳氏(12)をはじめとした多くの研究がある。それぞれ各地の道中日記などの分析からルートとその変化、関所の通行、社寺参詣における御師の役割、講の組織と参詣経費の問題、女性の旅の有様など、近世の伊勢参宮について多様な角度から明らかにしている。

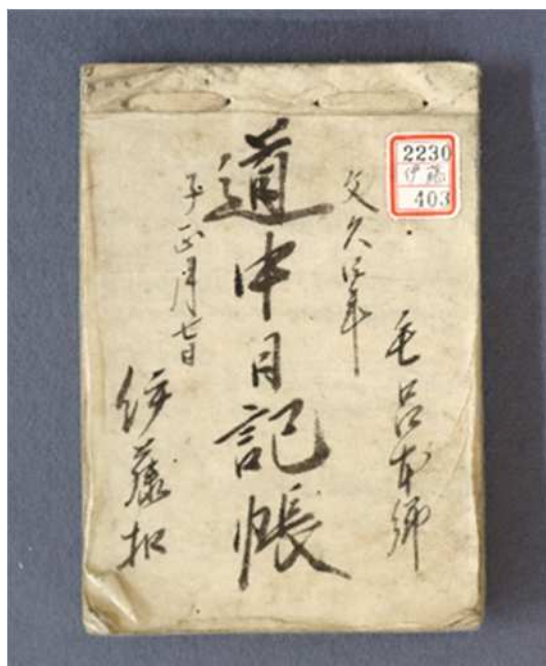
また、地方史研究の中でも、各地の伊勢参宮についての研究成果がみられる。埼玉県の伊勢参宮については、平成一九年(二〇〇七)に埼玉県立歴史と民俗の博物館で、社団法人霞会館と共催で開催された特別展「お伊勢さんと武蔵」およびその展示図録(13)で埼玉県域からの伊勢参宮関係資料をはじめ、伊勢と武蔵の関わりについて紹介している。

『埼玉地方史』では重田正夫氏が近世中期の忍藩秩父領の伊勢参宮について(14)、杉山正司氏が武蔵国の伊勢講の師檀関係について(15)の研究成果を報告している。また、近代の内容にはなるが、御師制度廃止後の御師と伊勢講や参宮者との関係について、石川達也氏(16)、谷口裕信氏(17)の研究がある。また、令和元年度から二年間、埼玉県神道青年会により埼玉県における伊勢参詣資料調査が行われ、その成果が『埼玉県の伊勢講』(18)にまとめられた。

2 伊藤家の伊勢参宮

それでは、文書館資料の中から、実際に埼玉県域から伊勢参宮をした人の記録をもとに、選択したルートや道中で立ち寄った場所等につ

いて見ていきたい。今回分析したのは、伊藤家文書の中の道中日記(19)である。(図1。以下、本論文中で注記のない道中日記は、全て伊藤家文書の道中日記をさす。)伊藤家文書は、入間郡毛呂本郷(現毛呂山町)の伊藤家に伝わった文書群で、伊藤家は幕末まで毛呂本郷の名主を務めていた家であった(20)。本論文で扱う道中日記に記されているのは文久四年(一八六四)の伊勢参宮の旅で、伊藤氏(名前の記載はなし)による記録である。



【図1】「道中日記帳」(伊藤家文書No.403)

(1) 伊勢参宮のルートについて

はじめにこの伊勢参宮の旅の行程について確認しておく。道中日記に記されている旅の行程は表の通りである。

月	日	滞在場所
正月	7日	鹿山→箱根ヶ崎
	7(8?)日	→八王子→八日市→厚木
	8(9?)日	→大磯→箱根湯元
	9(10?)日	→畑→関所→箱根→三嶋
	11日	→原→吉原
	12日	→蒲原→由井→沖津→江尻
	13日	→府中
	14日	→鞠子→岡部→藤枝→嶋田
	15日	→金谷→日坂→掛川
	16日	→犬居→西川(才川)
	17日	→大平村→大野→門谷
	18日	→新城→赤坂
	19日	→藤川→岡崎→池鯉鮒→鳴海
	20日	→みや(宮)→名古屋城下→佐屋
	21日	→桑名→四日市
	22日	→かんべ(神戸)→白子→上野→津
	23日	→松坂町→新茶屋
	24日	伊勢(龍大夫宅へ)
	25日	伊勢(外宮、天の岩戸)
	26日	伊勢(二見ヶ浦、朝熊山、古市)
	27日	伊勢(太郎館大夫宅へ)
	28日	伊勢(内宮、龍大夫宅へ戻る)
	29日	→中津原→串田

月	日	滞在場所
2月	1日	→六軒→二本木
	2日	→いせち(伊勢地)→名張→三本松
	3日	→三輪→奈良
	4日	奈良(名所めぐり)→郡山→滝田
	5日	奈良(名所めぐり)→瀧之畑
	6日	→上市→宇野→五条→加室(鹿室)
	7日	→高野山→加室
	8日	→大坂
	9日	大坂(道頓堀)
	10日	大坂(名所めぐり)→橋本
	11日	→淀→鳥羽→京都
	12日	→黒谷→京都(名所めぐり)
	13日	→大津
	14日	→市川
	15日	→関ヶ原
	16日	→加納
	17日	→御嶽
	18日	→中津川
	19日	→福嶋関所→須原
	20日	→敷原
	21日	→松本
	22日	→おみ(麻績)
	23日	→(川中島)ひがの(氷鉤)村→(善光寺)大門町
	24日	→坂本
	25日	→上塩尻
	26日	→秋和村→上田町→染谷村→堀村→小諸
	27日	→臼井峠→坂下
	28日	→藤岡町
	29日	→飯田
3月	1日	→玉川→酒肴を楽しみ帰宅

【表 1】伊藤家の道中日記に記された
伊勢参宮の旅の行程

一月七日に鹿山(現日高市)を出立し、八王子十五宿の辺りを通り、箱根からは東海道の各宿を通って一月二十三日には伊勢参宮の人々向けの旅籠や茶屋が多く存在した新茶屋に到着している。翌日二十四日には伊勢御師の龍太夫の邸宅へ行き、二十八日まで伊勢で滞在した。二十九日には伊勢を出立し、初瀬街道を通って二月三日には奈良へ行った。数日奈良で滞在した後、大坂、京都も巡り、中山道を通って三月一日に玉川(現ときがわ町)の辺りまで戻ってきている。このルートがどのような性質のものかを考えるにあたり、関東地域からの近世の伊勢参宮者が選んだルートについて体系的に整理した小野寺惇氏の研究成果(21)を参照したい。小野寺氏のルート区分に当てはめると、伊勢参宮モデルルート基本型(22)にあたることがわかる。また、江戸時代に伊勢参宮に出かける人々は、出立時期として一月を選んだ例が多い。田植の前に帰郷できるような時期にするためというのが主な理由とされる(23)。このように、伊藤氏の伊勢参宮の旅は、旅の行程、時期ともに、江戸時代に伊勢参宮をした人々に類例が多いパターンの旅であったといえる。

(2) 伊勢滞在中の人々の行動

では、旅の内容について詳しくみていきたい。まずは旅の一番の目的である伊勢での滞在についてである。伊勢滞在中の道中日記の記述について、まずは原文を引用する。(【史料一】)

【史料一】

廿四日 天気昼頃方烈風大寒新茶屋秋田迄義之助是外三人手代罷

越義之助外壠人ハ龍大夫江戻り其式人二見江案内罷越候處ニ渡セ場不行之地誠ニ大寒ニ付二見迄不罷越龍大夫江七ツ時着仕候

廿五日

龍大夫ニ而大々修行外宮廻拝礼仕天之岩戸迄案内有之帰宅仕候当日案内之儀ハ前田儀兵衛中居源次郎中間壠人其外龍大夫之山田役人四五人ニ而案内仕候

廿六日

駕籠ニ而ふく等も参り宜敷致し二見ヶ浦浅熊山参り浅間山麓ニ而夕飯当日も義兵衛殿始手代三人中間式人附添中喰少休等も甚入手当甚敷行届キ申候是又浅間麓夕飯之場ニ而入夜右場所迄龍大夫方高張提灯ニ而二之出向其外古市町方ひぜん油や両家方出向罷出古市町迄乗込参りにぎやかニ而甚面白存候

天気

廿七日八つ半時龍大夫出立内宮之太郎館大夫手代三人附添罷越館大夫へも手代式人出向七ツ半時館大夫江着

天気

廿八日館大夫ニ而大御神楽修行夫方内宮宮近拝礼手代案内御本社神前江館大夫罷出爰ニ而御神酒御供物等頂戴仕館大夫江帰宅御酒御膳出其内外宮迎ニ参り龍大夫江罷帰

先に述べたように一月二十三日に伊勢に到着し、翌二十四日に新茶屋から移動し、外宮御師龍太夫⁽²⁴⁾のもとに宿泊している。移動にあたっては手代の迎えが来ている。二十五日には龍太夫のもとで大々修行をしたとある。これは伊勢神宮を訪れた人々が奉納した太々神楽⁽²⁵⁾を指すと考えられる。その後、同日に外宮と天岩戸⁽²⁶⁾を案内してもらい、龍太夫宅へ帰宅している。案内には前田儀兵衛、中居源次郎という人物の他に中間一人、山田役人(外宮のある山田町の役人か)四、五人とかなりの人数の人が付き添って案内をしていたようである。二十六日には、二見浦と朝熊山を訪れている。その二か所は、伊勢神宮を訪れる人々が合わせて訪れることの多い場所だった。二見浦⁽²⁷⁾は伊勢神宮に参拝する前の禊の場とされていた場所であった。朝熊山⁽²⁸⁾に鎮座している金剛證寺は、伊勢神宮の鬼門にあたる場所に存在することから「伊勢神宮の奥の院」として、伊勢神宮とあわせて参拝するものとされてきた⁽²⁹⁾。また、二十六日の夜には古市を訪れている。古市は伊勢で随一の歓楽街で、芝居小屋や妓楼が存在した。「ひぜん油や」は、古市で有数の妓楼であった備前屋と油屋⁽³⁰⁾を指すと考えられる。その他、どのような店を訪れたかなど詳細な記述はないが、「にぎやかにて甚だ面白」という感想が記されており、滞在を楽しんだ様子は窺える。二十七日には龍大夫のもとを出て、内宮御師の太郎館大夫⁽³¹⁾という御師のもとへ移動している。この御師から御師への取次にあたって、三人の手代が付き添い、移動先の太郎館大夫のもとにも二人の手代が向かうという手厚い送迎であった。翌二十八日には太郎館大夫のもとで「大御神楽修行」をしているので、ここでも太神楽の奉納が行われている。その後手代の案内で内宮を参拝し、御供物や御神酒をいただい

て戻ってきている。太郎館大夫の邸宅に戻ってからは、「御酒御膳出」とあり、何等かの宴席が設けられたことがわかる。伊勢御師のもてなしはとても豪華なものであったことが知られている。例えば内宮御師の岡田太夫の家で神楽奉納後に出された膳は、

【一の膳】 皿 独活せん切、とさかのり、かうたけ、さより糸作り、

紅酢 壺 磯もの、銀杏

瓦器 粒さんせう、花しほ

味噌羹 松露、くづし身、あられ 飯

【二の膳】 白木臺 紅かんでん、肴、青磯草、ねりからし

白木臺籠 大根、かちぐり、干菓子

椀盛 鯛すまし、さんせう

【三の膳】 白木臺 伊勢海老 白木臺 鶴

椀すまし 鯛真子、じゅんさい

【四の膳】 皿 鯛塩焼 猪口 ウルカノシオカラ

【その他】 重引 生麩、すりしろうが 椀 尾ツキ、すまし

猪口 ウルカノシオカラ

平敷みそ、松だけ、伊勢えび、ゆば

皿 子鯛を巻、但し酢にて味とる、ぼうふう

大鉢引 鎌倉海老一色

二見浦という箱入り干菓子一箱ずつ

酒 湯 香物

(32)

右のような内容であり、伊勢の海鮮や名物をふんだんに使用した充実

したものであった。伊藤家の人が食べた食事についての詳細は不明だが、「御膳」という表現から推測しても同様の豪華なものであっただろう。

このように丁重な送迎や伊勢神宮および周辺の案内、豪華な食事など、御師邸で受けるもてなしも伊勢参宮の旅の大きな楽しみの一つであったと考えられる。その後、手代が迎えに来て、再び龍大夫のもとへ戻っている。このことから、今回の伊勢参宮における滞在の拠点は外宮御師の龍太夫であったこと、内宮を参拝するときは内宮御師に取り次ぎをするというように、それぞれの受け持ちは明確にされていたことが記録上からわかる。

(3) 伊勢参宮道中の名所巡りと名物

伊勢参宮の旅でのもう一つの目的は各地の名所を巡ることであった。今回の伊藤家の旅でも各地の名所といえる場所を多く訪れている。伊勢神宮以外に立ち寄った、道中日記に記されている主な場所を伊勢滞在中に訪れた場所については既に述べたため省略し、伊勢に至るまでと、伊勢滞在後に分けてまとめた。次の通りである。

伊勢に至るまで

清見寺、久能山東照宮、浅間神社(府中)、夜泣き石(小夜の中山)、無間山無間寺、秋葉山、豊川稲荷、熱田明神、八剣明神、津島牛頭天王

伊勢滞在後

長谷観音、三輪大明神、猿沢の池、東大寺(二月堂、三月堂、四月堂、

大仏殿)、三笠山、春日大明神、西の京薬師、小泉村庚申、法隆寺、竜田明神、達磨寺、染井寺、当麻寺、岡寺、とうの峯(談山神社)、吉野山、蔵王権現、高野山、龍光院、石清水八幡宮、藤森稻荷、三十三間堂、本福寺、御所、吉田社、下加茂、上加茂、今宮大神、北野天神社、二条の城、善光寺

これを見ると、主に各地の規模の大きな寺社を中心に訪れていたことがわかる。紙数の都合上、一つ一つの場所について詳細を論じることはしないが、近世に多く出版された名所図会や名所案内などにも掲載されている場所が多く含まれている。在地から伊勢に至るまでの名所巡りについては、谷釜尋徳氏の研究成果⁽³³⁾がある。その中の江戸近郊地の庶民がよく訪れた名所⁽³⁴⁾とほぼ同じところを、今回の伊勢参宮の旅でも訪れている。訪れた名所の数としては、伊勢神宮を訪れた後に訪れた大阪、奈良、京都の寺社の数が多い。帰路の中山道では善光寺しか途中で立ち寄った場所の記載はなく、道中日記の書き方も各宿の泊まった場所を順番に記載するだけの簡素なものになる。道中日記には遊興に関することはあまり記載されない場合が多く、伊藤家の道中日記もそれは同様である。伊勢での古市の滞在以外に見られるのは、大坂道頓堀での芝居見物である。「角之芝居角之芝居風聞宜敷大当りニ而一見見物仕候」とあり、「角之芝居」とは道頓堀角座⁽³⁵⁾のことを指すと考えられる。風聞を聞いて一目見てみたい、と訪れていることから、名物の情報伝達により、旅に掻き立てられる人が増加したということが史料上も確認できる。京都では権田直助という人物の家に行き、京都の街並みを案内してもらったという記述が見られる。これは、判

明している年譜⁽³⁶⁾と対照して活動場所が合致するため、毛呂本郷出身の国学者、権田直助⁽³⁷⁾とみて良いだろう。

各地で食べた名物についても一部記載が見られる。うなぎ(原宿と吉原宿の間)、くりのこ餅(吉原宿と蒲原宿の間)、あめの餅(小夜の中山)、わらび餅(日坂宿)が、記述が見られるものである。いくつか感想が記されているものもあるが、うなぎについては「まづくして格高直」(価格が高くてまずい)、わらび餅も「此餅まづし」(この餅はまずい)とあまり気に入らなかった様子もうかがえる。

また、後述するようにこの文久四年(一八六四)の伊勢参宮の旅については複数名で出かけているが、伊勢での滞在を終え、名所巡りに向かう段階になると「小田谷村健二郎、辰之助、太三郎、三人ハ紀州路江分ル」というように一部の人々が別の道を選んで分かれて行動する場合が出てきている。伊勢参宮までは共通の目的を果たすために行動を共にしていたが、名所巡りに関しては必ずしもまとまって行動せず、個々の事情によってある程度自由に行く道を選んでいったということが考えられる。

帰路については先に述べたように宿泊した場所が記されているのみのところが多く、一か所での滞在日数も少ないことからあまり特徴的な活動は見受けられない。ただし、地元の毛呂本郷に近づいた際に、越生宿まで村の一同が迎えに出て、酒肴を楽しんで帰宅するということが行われている。これはサカムカエ⁽³⁸⁾の一種ではないかと考えられる。伊勢参宮の際に行われる例が多いとされる習わしを確かに行っていたことが史料上からもうかがえる。

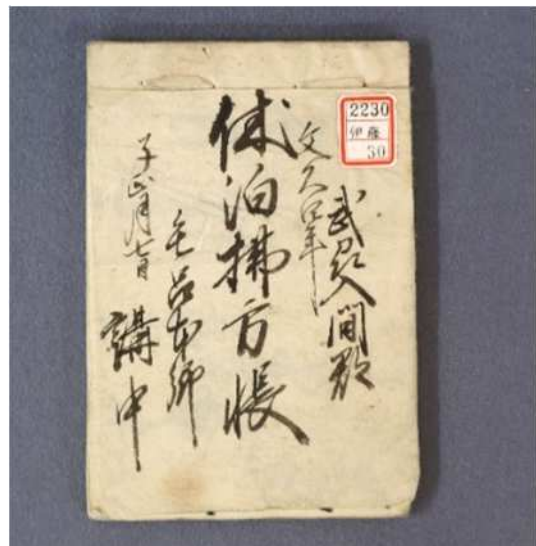
宿泊地名	宿屋名	
鹿山	関屋	中
箱根ヶ崎	関屋三五郎	
八日市	伊勢屋五郎右衛門	中
厚木	穀屋佐兵衛	
大磯	山本基右衛門	中
箱根湯元	福住九蔵	
箱根	桔梗屋五左衛門	
三嶋	銭屋伊三郎	
吉原	四つ目屋平左衛門	
江尻	(大竹屋平七)	※御用宿で泊まらず
	野村屋忠左衛門	
	小嶋屋政右衛門	
	石垣彦大夫	中
府中	万屋清三郎	
嶋田	楽屋七郎右衛門	
掛川	大黒屋源五郎	
犬居	なべ屋六右衛門	中
才川	吉のや権平	
大平村	山本屋九兵衛	中
門谷	かしわや与七	
新城	かしわや惣右衛門	中
赤坂	高田屋六三郎	
鳴海	銭屋新三郎	
佐屋	藤屋善右衛門	
桑名	堺屋三右衛門	中
四日市	帯屋七郎左衛門	
津	若狭屋六左衛門	

宿泊地名	宿屋名	
串田	あつまや半七	
二本木	角屋九右衛門	
伊勢路	大和や	中
三本松	ぬしや藤右衛門	
	ごまや又三郎	中
奈良	舩屋伊右衛門	
	仲屋伊右衛門	中
滝田	檜屋喜六	
八木原	木原屋嘉右衛門	中
瀧の畑	森川屋儀兵衛	
宇野	笠屋	中
鹿室	玉屋興次右衛門	
市川	菊屋忠兵衛	
関ヶ原	瀬川屋	
加納	紙屋源助	
御嶽	芝屋十兵衛	
中津川	土屋長兵衛	
須原	かうじや羽左衛門	
敷原	一之瀬屋五郎兵衛	
おみ	うす井忠兵衛	
大門町	江戸屋茂左衛門	
坂本	中沢四五右衛門	
上塩尻	清水銀右衛門	
小諸	つるや平左衛門	
坂下	中沢屋中右衛門	
藤岡町	丁子屋	

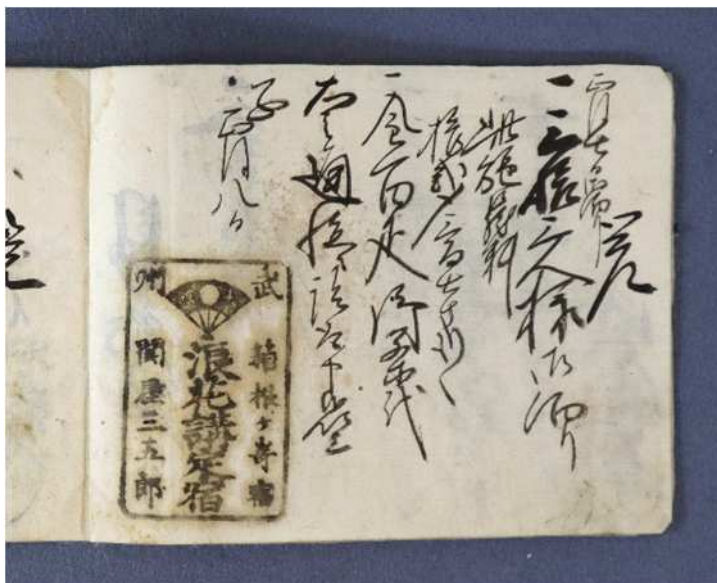
【表 2】伊藤家の伊勢参宮の宿泊場所

(4) 伊勢参宮道中の宿泊場所
 伊藤家の道中日記には道中で宿泊した場所についての記述が各日毎に見られる。伊勢神宮を訪れるまでの宿泊場所については、道中日記とは別に「休泊払方帳」(39)という史料(図2)にも記録がつけられており、そこでは各宿の宿泊料や、宿場の印も確認することができる。道中日記と「休泊払方帳」に記述のあった道中で泊まった宿は表の通りである。

今回、この一つ一つについて詳細な調査はできていないが、一つの方向性を考える視点として浪花講(40)についての視点から検討してみたい。浪花講の指定旅宿を掲載した浪花講定宿帳は多くの種類が発行されているが、今回は文書館の収蔵史料である「大坂浪花講関東講定宿并定休所妙薬取次名前附」(41)と照らしあわせてとらえ、掲載されていたのは箱根湯本の福住九蔵、吉原の四ツ目屋平左衛門、江尻の大竹屋平七(実際の宿泊はできず(42)、府中の万や平三郎、嶋田の兜屋七郎右衛門の四つの宿場だった。全体からすると割合は低く、浪花講に所属している宿を中心に選んだということはないと考えられる。ただし、この定宿帳に載っていない宿でも「浪速講定宿」の印を用いている宿場が存在(図3)するため、他の定宿帳もあわせてさらなる検討が必要となる。



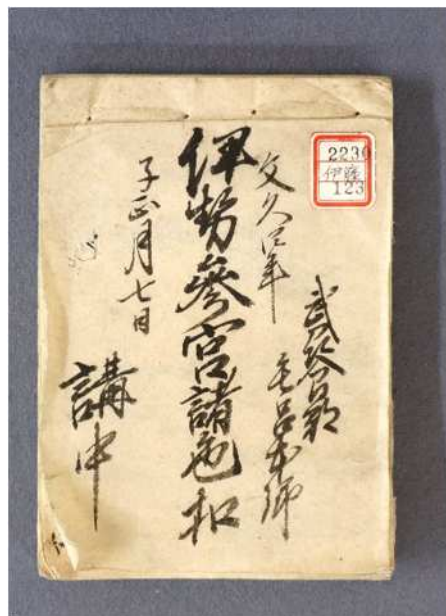
【図 2】「休泊払方帳」(伊藤家文書No.30)



【図3】箱根ヶ崎宿の関屋三五郎の「浪花講定宿」の印

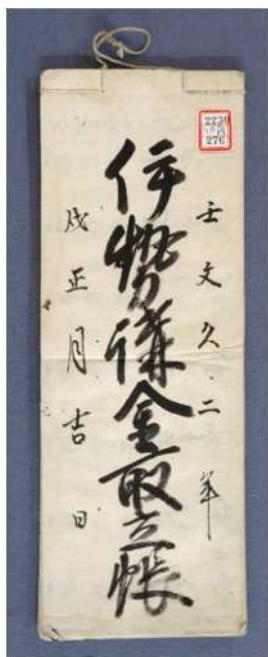
(5) 伊勢参宮の旅でかかった費用

次に、旅でかかった費用についてである。伊藤家の道中日記の旅に
関連する金銭出納簿として、先に宿泊場所の史料として用いた「休泊
払方帳」と、「伊勢参宮諸色控」(43)(図4)がある。先述したように、当
時の旅の記録としては遊興に関するものは記載していないことが多く、
これらの文書にも伊勢に到着するまでの記録しか明確な記載はない。
このような限られた内容とはなるが、判明する限りでの費用について
みていきたい。



【図4】「伊勢参宮諸色控」
(伊藤家文書No.123)

まず前提として、伊藤家の道中日記に記された旅の参加人数につ
て言及しておく。構成員については後述するが、宿泊の際の人数の記
録から三十五人の旅であったことがわかる。ただし、分かれての宿泊
などのためか、宿泊場所によっては多少人数が変動している場合もあ
る。旅にかかった費用のうち各地でかかった主な費用が宿泊費である。
行きは主に東海道の各宿に宿泊している。例えば嶋田宿では金二両二
朱と二百文、津宿では金二両三朱というように、三十五名で金二両二
朱を支払っている例が多い。一人当たりに換算すると一人四百文程度
と考えられる。飲食費についてはお茶代としてまとめて記されている
ため、明確に何を食べたかは明らかにならないが、旅行者全員で金百
正程度のところが多い。旅の一番の目的である伊勢滞在中の費用も記
載がある。外宮では「大々修行」(太々神楽奉納)のための費用として
神楽金二十両、三十五名の坊入三十五両、諸祝儀など(御師の家老や手
代にも金一分〜二分を渡している)の支払いがあり、合計金六十二



【図 5】「伊勢講金取立帳」
(伊藤家文書No.276)

両一分二朱の費用がかかっている。内宮でも大々神樂修行(同じく太々神樂奉納)の費用として奉納金十二両がかかっている。このように記録のある部分だけでもかなりの高額を必要としたことがわかる。特に伊勢御師のもとで滞在し、神樂を奉納するにはまとまった額が必要であった。地域や参宮に出かける人の経済状態にもよるが、当時の庶民にとって一人の力で伊勢参宮に出かけることは難しかったことが推測される。

3 毛呂本郷の伊勢講の活動

2章までで述べてきたように、伊勢参宮は高額を必要とするもので、江戸時代に庶民が単独で成し遂げることは困難な場合が多かった。そのような人たちが参宮を成し遂げるために組んだのが伊勢講である。伊藤家のある毛呂本郷にも伊勢講が存在し、伊藤家文書の中にもその活動を示す文書がある(44)。その中から今回道中日記で見えてきた旅に係の深い内容を中心に、毛呂本郷の伊勢講の活動について述べたい。まず、講の構成員についてである。文久二年(一八六二)の「伊勢講金取立帳」(45)(図5)には講構成員の名簿があり、そこには三十五名の名前が記されている。(図6)



【図 6】「伊勢講金取立帳」(伊藤家文書No.276)の
講構成員連名

この史料には名前が列記されているのみで、役職などの記載はないが、道中日記の方にも構成員名簿があり、それらには講の中で務めていた役職の記載もある。講親の中に伊藤家の当主であった伊藤専次郎の名前も見られる。伊藤家の人が毛呂本郷の伊勢講で中心的な役割を果たしていたようである。また、名前の横に「小田谷」、「上野」、「平山」という近くの村の名前が記された人物もいる。毛呂本郷の人だけではなく、近隣の村の者も講に参加していたことがわかる。この三十五名は道中日記に記載のあった講構成員と大方名前が一致する(46)。このことから、この文久四年の旅は毛呂本郷の伊勢講の構成

員全員の総参り(47)であったと考えられる。なお、道中日記の方の構成員名簿には、講の構成員以外に二名の名前が見られる。うち一名には冒頭に金額の記載があり、この旅のみ特別に金を支払った上で参加した人物であることが推測される。また、もう一名の名前には抜け参りという記載がある。抜け参りとは親や主人、村役人などの許しを受けないで家を抜け出し、往来手形なしで伊勢神宮に参拝することで、江戸時代にはしばしば見られた参宮方法である。このように史料上も名前を出し、記述が見られることから、抜け参りもある程度黙認されていたことがわかる。ただし宿泊場所の台帳では、泊まった人数としては三十五名以内の人数の記載がほとんどであることから、基本的には宿泊をとにしたのは講の構成員のみで、他の二人については旅に同行はしたものの、宿泊などについては別行動をしていたときも多い(48)と考えられる。なお、「講金取立帳」の構成員名簿の中には、京都滞在中に案内をしていた国学者、権田直助の名も見られる。地域の伊勢講に加入し、ともに活動していたということが判明したため、権田直助の活動の一端を知る史料としても今後使用していくことができると考える。

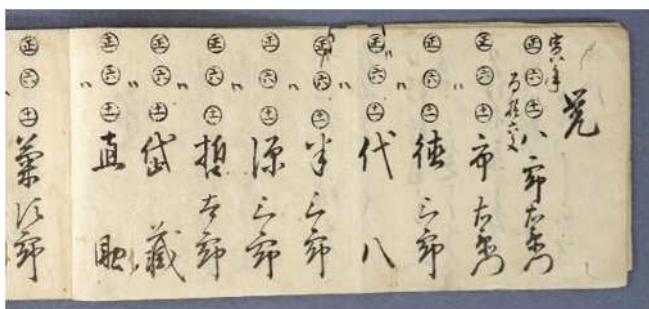
毛呂本郷の伊勢講の講金の回収などについては、嘉永七年(一八五四)の「伊勢講金取立帳」(49)の冒頭に記載がある。

【史料二】

- 一 正月六月十一月年に三度日待致候事
- 一 日待ごとに銀五匁ツ、相掛可申事
- 一 日待雑用百文づゝ之定之事

一日待不参之者は燈明料として百文づゝ宿へさし出可申事

これを見ると、この伊勢講では正月、六月、十一月の年に三度、お日待ち(50)を行っており、その日を基準に集金を行っていたようである。お日待ちごとに銀五匁ずつを出すこと、日待ちの儀式の雑用として百文ずつを出すこと、日待ちに不参加の者も燈明料として百文宿へ差し出すことが定められていた。文久の帳簿には集金方法について詳細な記述は見られないが、嘉永の帳簿と同じ集金確認欄が用意されている(図7)。そのため、額などが同じではない可能性はあるものの、同様の集金方法をとっていたとみて良いと考えられる。



【図7】「伊勢講金取立帳」(伊藤家文書No.219)の講金集金確認欄



【図 8】
「伊勢講金取立帳」
(伊藤家文書 No.219)

それでは、道中日記に記された旅と同時期の文久の帳簿(51)から、どのくらいの額の集金がなされていたのかを確認する。日待ちの日ごとに記された合計金額は次の通りである。

文久二年	正月二十一日	金一両一分十匁	
	六月二十一日	金一両一分二朱二七二文	
	十一月二十一日	金一両二分	計金四両二朱一貫三二二文
文久三年	正月二十一日	金二両二朱十匁	
	六月二十一日	金二両一分	
	十一月二十一日	金二両一分二朱	計金六両三分十匁

これに加えて新規加入は講金一人分で金二両三分ずつ支払いという記載もあり、新規加入者と思われる十名ほどの記載がある。その他回収漏れ分の回収金額を全て合計し、計六十両三分二朱が集まっているが、これでも文久四年(一八六四)の旅で使用した総額には足りていな

い。この伊勢講の伊勢参宮が毎回総参りであったのか、旅での出費はどこまでが伊勢講の講金で支払われていたのか、伊勢参宮の頻度は、など史料が見つけれられていない部分が多く、現時点では旅の費用との関連について結論づけるのは難しい状況である。だが、文久四年の旅の使用金額を基準にすると、約二年分の講金で一回の神楽奉納分の金額は集まっていたようである。

おわりに

ここまで伊藤家文書の文久四年(一八六四)の道中日記の記述から、毛呂本郷の人々の伊勢参宮について見てきた。文久四年(一八六四)の旅で選んだルートは、近世に選択された例が多い、比較的一般的ともいえるルートであった。伊勢での滞在中も外宮と内宮へ神楽を奉納して参拜し、二見ヶ浦、朝熊山にも訪れ、古市も訪れるという典型的な行動をとっていた。帰路では近畿地方で名所巡りをし、中山道を通じて帰郷している。道中、各地の大規模な寺社を訪れ、名物などに触れていた。帰郷時には坂迎のような宴の存在も確認できた。また、参宮には大きな金額の金銭を必要とし、特に伊勢御師のもとでの神楽奉納などにはまとまった金額が必要であった。そんな参宮を実現するため組織として毛呂本郷でも伊勢講が結成されており、文久の頃には三十五名の人が加入していた。お日待ちの行事とともに集金を行って、約二年で一回の神楽奉納分の金額程度を集めていた。

確認できた史料上の制約もあり、特に伊勢講の活動については今回の調査だけでは明らかにすることができていない部分が多くある。伊勢参宮の頻度や人数について、情報が得られる史料を探していきたい

と考える。また、国学者の権田直助が地域の伊勢講に関わっていたことも明らかにしたので、伊勢講加入者という人物という切り口からも調査してみたいと考えている。今後は、同時期、同地域の他の文書群の中にも伊勢参宮関連の史料がないか調査し、より詳細な比較検討をして、さらに毛呂本郷地域の伊勢参宮の実態を明らかにできるように努めていきたい。

註

- (1) 伊勢地方の木遣り歌から発生したとされる民謡の総称。踊り歌、木遣り歌、祝儀歌、道中歌などを含み、伊勢参宮の流行とともに全国に広まった。該当の歌は「伊勢に行きたい 伊勢路が見たい せめて一生に一度でも」
- (2) 新城常三著、新稿『社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房、一九八二年。
- (3) 西垣晴次『お伊勢まいり』岩波新書、一九八三年。西垣晴次編『民衆宗教史叢書』第十三巻 伊勢信仰(近世Ⅱ)、雄山閣出版、一九八四年。
- (4) 相蘇一弘「おかげ参りの実態に関する諸問題について」(『大阪市立博物館研究紀要』七、一九七五年)。
- (5) 小松芳郎「道中記にみる伊勢参詣—近世後期から明治期を通して—」(『信濃』三十八巻十二号、一九八六年)。
- (6) 山本光正「旅日記にみる近世の旅について」(『交通史研究』十三、一九八五年)。
- (7) 桜井邦夫「近世における東北地方からの旅」(『駒沢史学』三十四巻、一九八六年)。
- (8) 深井甚三「近世における抜け参りの展開とその主体」(『歴史』第五十輯、一九七七年)、深井甚三『江戸の旅人たち』吉川弘文館、一九九七年。
- (9) 原淳一郎、『江戸の寺社めぐり…鎌倉・江ノ島・お伊勢さん』吉川弘文館、二〇一一年。
- (10) 小野寺淳「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」(『筑波大学人文地理学研究』十四巻、一九九〇年)、小野寺淳「道中日記にみる東海道の景観イメージ—関東地方農村部からの伊勢参宮—」

- (『交通史研究』四九巻、二〇〇二年)など。
- (11) 金森敦子『伊勢詣と江戸の旅―道中日記に見る旅の値段―』文藝春秋、二〇〇四年。
- (12) 谷釜尋徳「近世後期における伊勢参宮の旅のルートと名所見物―江戸近郊地の庶民の場合―」(『日本体育大学紀要』三十五巻二号、二〇〇六年)、谷釜尋徳「近世後期の東北地方の庶民男女による伊勢参宮の旅のルートと歩行距離―旅日記を史料として―」(『東洋法学』第六〇巻第一号、二〇一六年)など。
- (13) 『霞会館資料第三十輯 お伊勢さんと武蔵』社団法人霞会館、二〇〇七年。なお、埼玉県立歴史と民俗の博物館での展示は平成十九年十月十六日〜十一月二十五日に開催された。
- (14) 重田正夫「近世中期における伊勢参宮の実態―忍藩秩父領を中心に―」(『埼玉地方史』第六十一号、二〇〇九年)。
- (15) 杉山正司「武蔵国における伊勢講の師檀関係」(『埼玉地方史』第六一号、二〇〇九年)。
- (16) 石川達也「御師制度廃止後の伊勢神宮崇敬団体に関する一考察」(『埼玉大学紀要(教育学部)』第五二巻第二号、二〇一七年)。
- (17) 谷口裕信「御師廃止後の龍大夫と旧配札地域―埼玉県北足立郡を事例として―」(『News Letter No. 1 伊勢参宮ツーリズムの近代史に関する実証的研究―御師廃止から昭和戦前期まで―』、二〇一七年)。
- (18) 埼玉県神道青年会編『埼玉県の伊勢講』神社新報社、二〇二一年)。
- (19) 「道中日記帳」(伊藤家文書No.四〇三二)
- (20) 埼玉県立文書館収蔵文書目録第34集『諸家文書目録V』埼玉県立文書館、一九九五年。
- (21) 前掲註(10)。
- (22) 前掲註(10)、一三九ページ。「伊勢参宮モデルルート」の基本型は、往路東海道を伊勢神宮へ向かい、伊勢より奈良・大坂・京都の社寺を巡り、中山道を復路とするルートをさしている。往路における秋葉山・鳳来寺經由、復路における善光寺經由に特色があるとす。
- (23) 前掲註(18)など
- (24) 外宮御師。明治十二年の調査では、山田三方の年寄家を務めた家であり、十八万六千体(うち武蔵国は約一五―三ヶ村)の配札を行っていたとされる。(皇学館大学史料編纂所編『神宮御師資料』(外宮編二)、皇学館大学出版部、一九八四年、八九―九〇ページ。)
- (25) 伊勢神宮へ一般参詣人が奉納する太神楽のうち、最も大がかりな神楽。江戸時代、御師の邸内で催され、奉仕の楽人は一〇〇人を超えたときれる。太神楽には太太神楽・大神楽・小神楽の等級がある。
- (26) 現在の三重県志摩市磯部町にある。天照大神が須佐之男命の乱行に心を痛め、内にこもってしまったという天の岩戸神話の舞台とされている。
- (27) 現在の三重県伊勢市二見町今一色から立石崎に至る海岸。二見興玉神社があり、夫婦岩が有名な景勝地。
- (28) 現在の三重県伊勢市朝熊町にある山。山頂付近に金剛證寺がある。
- (29) 伊勢音頭にも「お伊勢参らば朝熊をかけよ、朝熊かけねば片参り」と歌われていた。
- (30) 伊勢の古市の代表的な妓楼として油屋、備前屋、杉本屋などが知られていた。伊勢音頭はこうした妓楼から広まっていた。備前屋では遊女総出で伊勢音頭を踊る総踊りで知られ、浮世絵にも描かれた。油屋は寛政八年に「油屋騒動」といわれる殺傷事件があり、それが歌舞伎の演目とし

て描かれた。

(31) 内宮御師。明治十二年の調査では、会合年寄を兼務してきた家であり、約三万九千戸(うち武蔵国は約五百ヶ村)を超える配札を行っていたとされる。(皇学館大学史料編纂所編『神宮御師資料』(内宮編六)、皇学館大学出版部、一九八〇年、一二二—一二四ページ。)

(32) 筆者不詳「伊勢参宮献立道中記」(竹内利美、原口虎雄、宮堅常一編『日本庶民生活史料集成』(第二十卷 探検・紀行・地誌一)、三一書房、一九七二年)、六〇六頁〜六〇九頁引用。

(33) 谷釜尋徳「近世後期における伊勢参宮の旅のルートと名所見物—江戸近郊地の庶民の場合—」(『日本体育大学紀要』三十五卷二号、二〇〇六年)。

(34) 前掲註(33)、一一九ページの表参照。

(35) 現在の大阪府中央区にあった劇場。太左衛門橋を南へ渡った角にあったことから角の芝居と呼ばれた。宝暦八年(一七五八)に並木正三が回り舞台を考案し、大当たりした。

(36) 『毛呂山町史料集 第五集 草莽の志士 権田直助』毛呂山町教育委員会、一九九五年、一二〇ページ参照。

(37) 文化六年、毛呂本郷出身。医学を学び、医師として開業するかたわら、国学を平田篤胤に学び、尊王攘夷運動にも関わった。晩年は大山阿夫利神社の神官と三嶋神社の宮司を兼務し、神社再興の先駆者となった。

(38) 熊野や伊勢などへ参詣に出かけたものを、帰着の際に出迎えること。参宮者が到着してすぐ共同飲食をする例が多いことから「酒迎え」の意味ではないかとする説もあるが、伊勢参宮を経て神に近い神聖な存在となった代参者と直会のような形で共同飲食をすることで代参者が再び人間の生

活へと回帰できる場を用意するという「境迎え」であるといわれている。

(櫻井徳太郎「サカムカエ—代参者送迎の習俗について—」(『人類科学』第五集 交通・川・労働、一九五三年)、三十ページ)。

(39) 「休泊払方帳」(伊藤家文書No.三〇〇)
文化元年(一八〇四)、大坂の松屋甚四郎と手代源助および江戸の鍋屋甚八によって発起された近世における旅宿組合。街道宿駅の風紀を肅清する目的で結成された。優良旅宿や休憩所を指定し、看板を交付した。旅行者が浪花講の定宿帳を得て宿駅ごとに看板を目印に休泊できるようにしたので、大いに好評を博して全国に及び、三都講など類似の講も出現した。

(40) 文化元年(一八〇四)、大坂の松屋甚四郎と手代源助および江戸の鍋屋甚八によって発起された近世における旅宿組合。街道宿駅の風紀を肅清する目的で結成された。優良旅宿や休憩所を指定し、看板を交付した。旅行者が浪花講の定宿帳を得て宿駅ごとに看板を目印に休泊できるようにしたので、大いに好評を博して全国に及び、三都講など類似の講も出現した。

(41) 「大坂浪花講関東講定宿并定休所妙薬取次名前附」(諸井(興)家文書No.四七九)
江尻宿では大竹屋平七のところへ宿泊しようとしたが、御用宿(公用旅行者が宿駅の宿泊施設を優先的に使用すること)となっていたため、宿泊することができず、別の宿泊施設に分宿することになった。

(42) 「伊勢参宮諸色控」(伊藤家文書No.一二三)
伊勢講の運営に関するものは「伊勢講金預帳(文久三年十一月)」(伊藤家文書No.一八)、「伊勢大々講帳面入袋」(伊藤家文書No.一五五)、「伊勢講金取立帳(文久四年正月)」(伊藤家文書No.二二九)、「伊勢講金取立帳(文久四年正月)」(伊藤家文書No.二七六)の四点がある。

(43) 「伊勢講金取立帳(文久四年正月)」(伊藤家文書No.二七六)
国学者の権田直助は、「講金取立帳」においては本講連名の中に名

(44) 国学者の権田直助は、「講金取立帳」においては本講連名の中に名を連ねているが、文久四年の「道中日記」の方の本講連名では、権田年助という直助の息子とみられる人物に変わっている。文久四年は直助が京都に滞在していたため、毛呂本郷からは息子の年助が代わりに伊勢参宮をし

たのだと考えられる。なお、直助については「道中日記」の連名の最後に京都の住所とともに名前が記載されている。京都で直助と合流した際、一行はこの住所を訪ねていったようである。

(47) 氏子や信者、ここでは講の仲間全員がそろって参詣すること。これと異なる参詣の仕方に代参がある。代参は講中から代表者を決めて遠隔地の社寺参詣に出かけることで、代表者は講中からくじ引きや輪番制によって選ばれ、講中で積み立てた金を社寺への納金や参詣の旅費として持参する。

(48) 江尻宿では分宿のうちの片方の宿泊代金に抜け参りの記述が見られるので、抜け参りの人が一緒に宿泊した場合もあったようである。

(49) 「伊勢講金取立帳(〜万延二年十一月)(伊藤家文書 No. 二一九)

(50) 集落の人々や一族があらかじめ定めた宿に集まり、前の夜から忌み籠りをしながら日の出を待つ民俗行事。

(51) 前掲註 (45)